

日本画の部

北村起章さん・立田

十年ほど前、日本画を描いていた母親のますえさんの影響で、日本画に興味を持ち、描き始めた北村さん。自宅には、描いた絵がところどころに飾られています。

絵のサイズは小ささまで、一つの作品を仕上げるのに一年近くかかるとか。どの絵を見ても、濃厚そうな人柄が表れているように、やさしい筆使いの絵が多く見られます。

「風景画が多いです。自分なりに頭の中で空想して、自分の伝えたい気持ちを描こうとするんですけれど、難しいですね。果



「風景画が多いです。自分なりに頭の中で空想して、自分の伝えたい気持ちを描こうとするんですけれど、難しいですね。果

は写真をやっけていて、市展にも何度か出品。賞もたくさんもらっています。

「写真に日本画、どちらも構図が決まりすぎてしまわうんです。型にはまりすぎると、新鮮味が欠けてくるんですよ。きれいなだけじゃだめなんです。この型を自分で打ち破るのにすごく苦労しています」

最後に日本画の魅力についてお聞きしました。

「人にはない自分な



りのやり方で自由にできるでしょう。目標に向かって努力し、自分の方を試すことができ、とても楽しいですよ」

デザインの部

井上利道さん・大塚

南園市内の印刷会社に勤務している井上さん。グラフィックデザインの仕事を始めて三年くらいは浅いが、「以前は水彩画を描いていました。グラフィックデザインはポスターカラー以外にも水彩の絵具や色鉛筆など自由な素材を使いますので、表現手段としての可能性を感じています」

グラフィック・デザインを選んだもう一つの理由は、社会的なメッセージを込めやすいジャンルだとも。

「少し前までは自卒のフォーク・ソングを歌っていました」

フォーク・ソングには年齢的な限界も感じましたので、その代りに絵筆を取ったとも言えるのではと思います。

音楽でも絵でも、社会へのメッセージを込めたいという点では共通しているのではないのでしょうか」

テーマも、身近な日常生活のなかで感じ取れるものを大勇にしているとのこと。今年の夏、長女美利佳ちゃんの誕生したのをきっかけに、「子どもらしさが失われている時代性について、積極的に発言していかなければと感じるようになってい



ました」

時代に対して批判的な目を持つているためか、色調としてはモノトーンが多くて、どうしても暗い感じになってしまっていますとのこと。



彫塑工芸の部

上村宜道さん・岡豊町



徳島市から転居し、竹林に面した山裾の閑静な場所に住居と工房を構えたのが、昭和五十八年。きっかけは、二人の息子さんが高知医科大学に勤務したことから。

「薬を作る条件から、住まい

をここに決めました。焼き物との付き合いは古く、近所に二百年は続いていた大谷焼きの窯元があつてちよくちよく出入りしては土をこねて遊んだのが初め。しかし、本格的にこの道に没頭したのは十二・三年ほど前からです」

以来土いじりの毎日、食器から花器、壺類まで家庭で使うものはほとんどが自作です。焼き物の魅力は形のないものに形を与え、生命を宿してやることにあります」

窯を開けてみないと、どんなに仕上がっているのか分からない

いとところに奥の深さがあるとのこと。作品を窯から出したとき、「しんとした夜、作品が冷気にさらされるに従って、表面に塗った土薬がチンチンと音を立てる時の神秘さが好きです」とのこと。

作品にはやさしさが表現されているとの評が多く、人柄を感じさせます。

「創作には、既成概念にとらわれずに、子どものような自由な発想を大切にすること。土曜日の夜には、十七・十八がここ



に集まって作品を造ります。グループからも力のある人が育ってきました」とうれしそうなお村さん。

今の特集

今はまさに、芸術の秋。南国市でも、11月22日（日）から29日（日）までの8日間、南国市展が開催されます。

これから出品作に取り組もうとしている人、そろそろ仕上げにはいっている人。多くの市民に親しまれてきた市民、今年も多くの出品が予想されます。



市展は、いわば芸術を愛する市民のお祭り。ランクからすれば、県展にはおよばないが、その分、肩肘を張らずに気楽に、



楽しみながら参加することが出来ます。

絵筆を取るもよし、カメラを持つもよし、ジャンルにこだわらず自由気ままに、

表現したいことを好きな方法でやってみては。芸術は楽しむものであることを、この秋体験してはいかがでしょうか。



昨年の市展の各部門で、特選や褒状に選ばれた方に、創作の楽しみを聞きました。

おわびと訂正

10月号の8ページお知らせでの市展の開催日で、24日（火）までは、29日（日）までの誤りでした。おわびして訂正します。

書道の部

武市 敏嗣 さん・駅前町



武市さんの書道歴に長く、五歳ぐらいのときに書道塾に通い始めたのが最初。当時は親に言われて通っていたため、本人はあまり乗り気ではなかったようです。

「武市さんの書道歴に長く、五歳ぐらいのときに書道塾に通い始めたのが最初。当時は親に言われて通っていたため、本人はあまり乗り気ではなかったようです。」

「武市さんの書道歴に長く、五歳ぐらいのときに書道塾に通い始めたのが最初。当時は親に言われて通っていたため、本人はあまり乗り気ではなかったようです。」



「武市さんの書道歴に長く、五歳ぐらいのときに書道塾に通い始めたのが最初。当時は親に言われて通っていたため、本人はあまり乗り気ではなかったようです。」

洋画の部

佐竹 茂 さん・大橋

小さいころから絵を描くことが好きだった佐竹さん、大学時代に先輩から教わったのが油絵との出会い。初めは小さなものばかり描いていたのですが、二十四歳のとき異展に出展するために大きなキャンバスに向かいました。以来現在まで異展や市展に出品しています。



「佐竹さんの洋画の部。小さいころから絵を描くことが好きだった佐竹さん、大学時代に先輩から教わったのが油絵との出会い。初めは小さなものばかり描いていたのですが、二十四歳のとき異展に出展するために大きなキャンバスに向かいました。以来現在まで異展や市展に出品しています。」

「佐竹さんの洋画の部。小さいころから絵を描くことが好きだった佐竹さん、大学時代に先輩から教わったのが油絵との出会い。初めは小さなものばかり描いていたのですが、二十四歳のとき異展に出展するために大きなキャンバスに向かいました。以来現在まで異展や市展に出品しています。」



写真の部

岡田 美智子 さん・浜改町

「市展に出品したのは昨年初めて、友人の勧めで思い切って出品したら、なんと特選でした。もう！まぐれ、まぐれっ！だって自分が一番びっくりして喜んでから」と、とても明るい岡田さん。



「岡田さんの写真の部。市展に出品したのは昨年初めて、友人の勧めで思い切って出品したら、なんと特選でした。もう！まぐれ、まぐれっ！だって自分が一番びっくりして喜んでから」と、とても明るい岡田さん。

「岡田さんの写真の部。市展に出品したのは昨年初めて、友人の勧めで思い切って出品したら、なんと特選でした。もう！まぐれ、まぐれっ！だって自分が一番びっくりして喜んでから」と、とても明るい岡田さん。



「岡田さんの写真の部。市展に出品したのは昨年初めて、友人の勧めで思い切って出品したら、なんと特選でした。もう！まぐれ、まぐれっ！だって自分が一番びっくりして喜んでから」と、とても明るい岡田さん。

漫画の部

葛目 義人 さん・岡豊町



「漫画を描き始めたのは十五歳の頃、退屈紛れに新聞に投稿していましたが、その頃属していたグループにはうらやまが溢れていました。私は理髪師の修業のため一時ブランク中でした。今は、理髪店を営んでいる葛目さん。」

「葛目さんの漫画の部。漫画を描き始めたのは十五歳の頃、退屈紛れに新聞に投稿していましたが、その頃属していたグループにはうらやまが溢れていました。私は理髪師の修業のため一時ブランク中でした。今は、理髪店を営んでいる葛目さん。」

「葛目さんの漫画の部。漫画を描き始めたのは十五歳の頃、退屈紛れに新聞に投稿していましたが、その頃属していたグループにはうらやまが溢れていました。私は理髪師の修業のため一時ブランク中でした。今は、理髪店を営んでいる葛目さん。」

